

ラグビーフットボールにおけるディフェンスについて

高 城 靖 尚

はじめに

よくディフェンス（防御）というと、タックルというひとつの技術に視線が注がれ、タックルそのものが防御の目標に見られがちであるが、最大の目標はスクラム・ラインアウト・モール・ラックでボールの所有権を奪い返すことである。

しかし攻撃側は、ゲインラインの突破、またはトライを目指して戦術を駆使してくる。これに対して防御側は攻撃側の動きを見てから反応しなければならない。またパスや、キックという異なるプレーに対応しなければならないので、ボールを奪い返すというよりは相手にミスを起こさせるというようなことが目標といったほうがよいかもしれない。

また、プレーの最小単位は個人のプレーであり、ディフェンスにおいても同じことが言える。しかし、個々の判断に任せるとディフェンスに歪が起きやすくなる。相手にミスをさせるにはより集団的にユニットとして、ディフェンスを行うことが望ましい。

今回は、その方法を今一度整理するとともにさらに工夫をしたディフェンス方法について述べた。

1. ディフェンスのキーファクターについて

ディフェンスのキーファクターとは①ボールの奪い合い②ミスさせる③タックル④カバーディフェンスである。この中でもミスをさせるということは、「まず、時間的に相手を制限して判断を狂わせ、相手に動けるスペースを奪い取ることにより、個々のスキルを効果的に使わせないようにすること」である。これはすなわち相手への接近の仕方・方法である。この相手への接近の仕方・方法はディフェンスにおいて大変重要な要素である。

2. ディフェンス方法について

1) アタック側のプレーに対しての種類

- ①一般プレーにおけるマークディフェンス（図1-1）
- ②スクラムにおけるマークディフェンス。（図1-2）
- ③つめディフェンス（図1-3）
- ④ドリフトディフェンス（図1-4）

上記のディフェンスパターンは、敵ライン攻撃の認識に基づくもので、もっとも明らかな有効性は、アタックに時間を与えないことである。前に出るディフェンス（マークディフェンス・つめディフェンス）とドリフトディフェンスは広く用いられてきたが、2つとも破られやすい特徴がある。前に出るディフェンスは、エキストラマン参加の攻撃に破られやすく、ドリフトディフェンスは、スイッチプレー（方向転換）・ダミーループなどに破られやすい傾向がある。

前に出るディフェンスは、明白にアタックの時間を奪い、アタックとの間との勢いを打ち消す意図を持っている。個々で大事なものは、ディフェンスの始動の速さとスピードを持ってあがること、そしてアタックに到達する時は、バランスを保つことである。前に出るディフェンスにはバリエーションがあって4UPの場合、ボールキャリアの前進を遮断することだけではなく、ボールキャリアとサポートプレーヤーの間を阻む意味もある。この場合OUT-IN（対面外側から内側へ）コース取りすることもある。また3UPは敵の多くのアタックがCTBクラッシュに傾倒する場合、用いられ、キックに対処する場合にも適している。

フラットパスによるミスパス（飛ばしパス）や位置でずらされ突破された場合にはこれらの

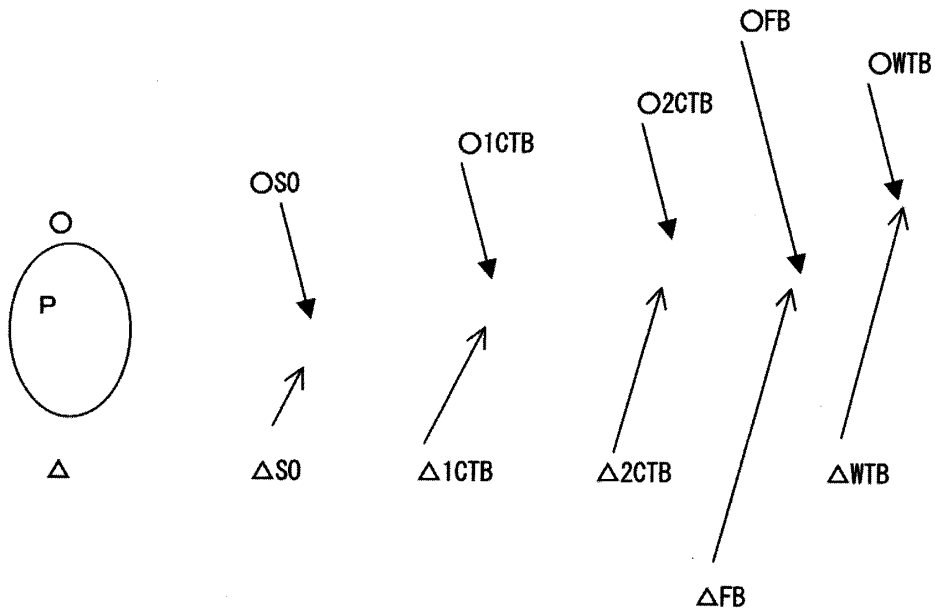
パターンは無力化することが多く、ディフェンスの出足も鈍ってしまう。対処法としてはこれらの基本システムから1線防御に応用力を持たせ、カバーリングで止めるのが定石で、その場合素早いバックロー・SHをおくことが非常に効果的である。

マークDF、つめDF、ドリフトDFの基本

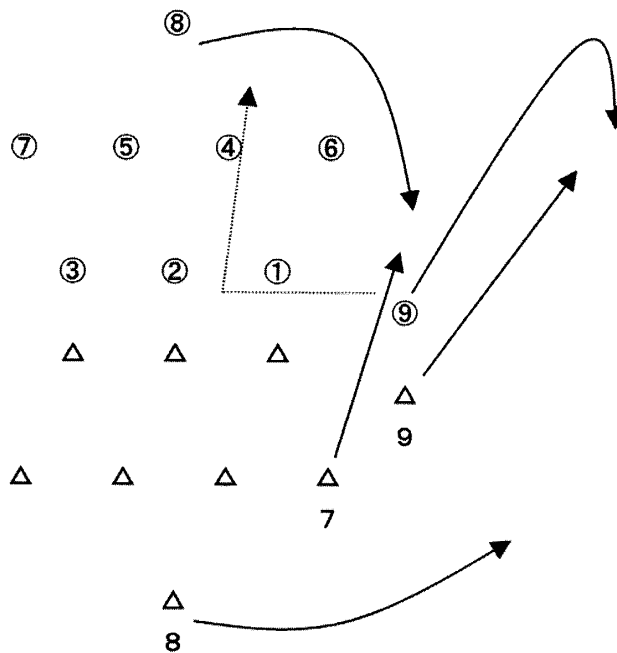
1. 速いポジショニング：オフサイドラインから1m離れる意識と低い姿勢で準備する。
2. コーリング：周りとの連携、自分のマークをノミネートする
3. DFコース：プレッシャーをかけながら内から外に追い込み間合いをつめる。自分のマークがパスしたら次のプレーヤーの内側を抑えながら追うコースを変える。

●マークディフェンス

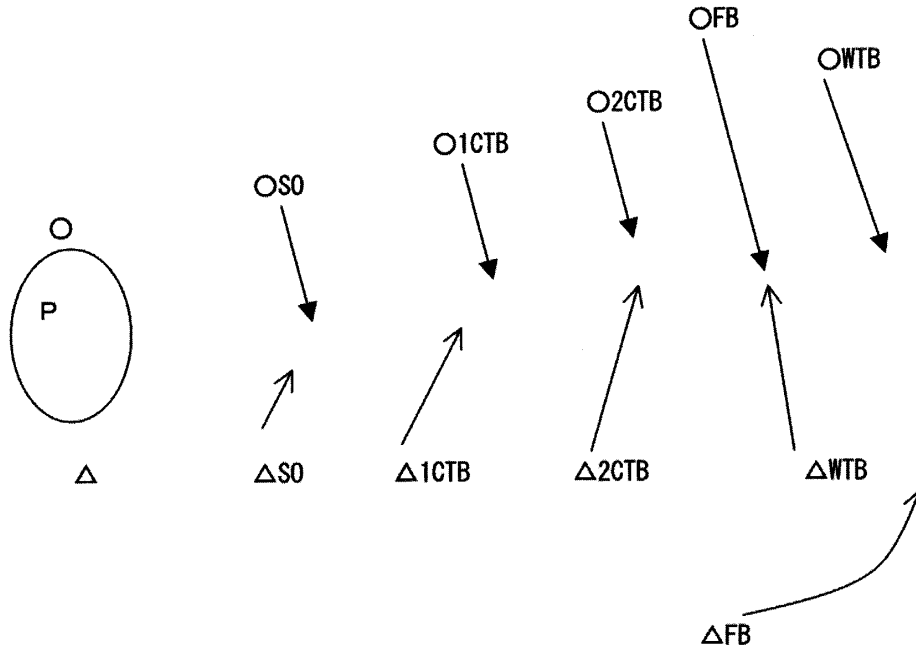
(図1-1)



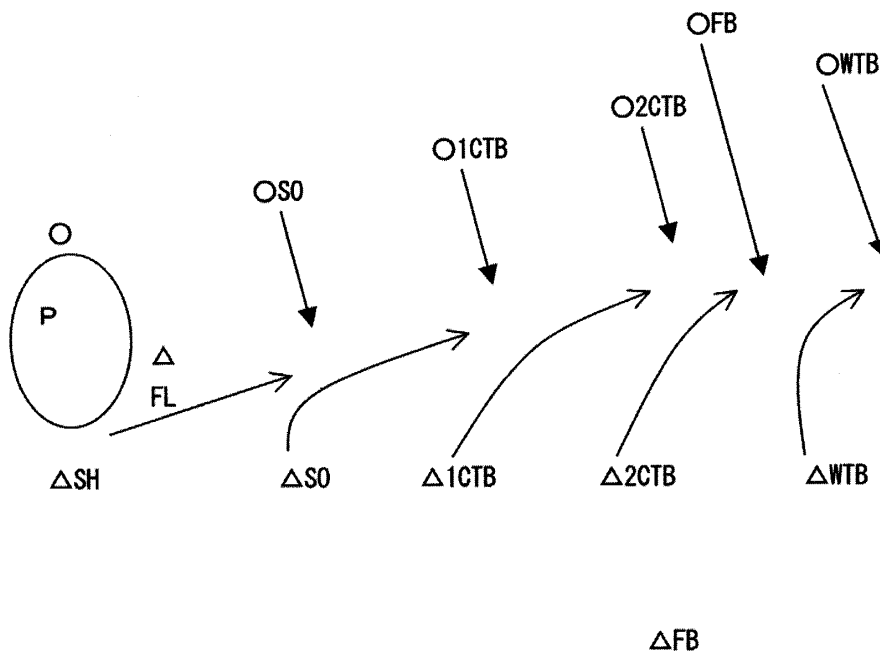
(図1-2)



●つめディフェンス
(図1-3)



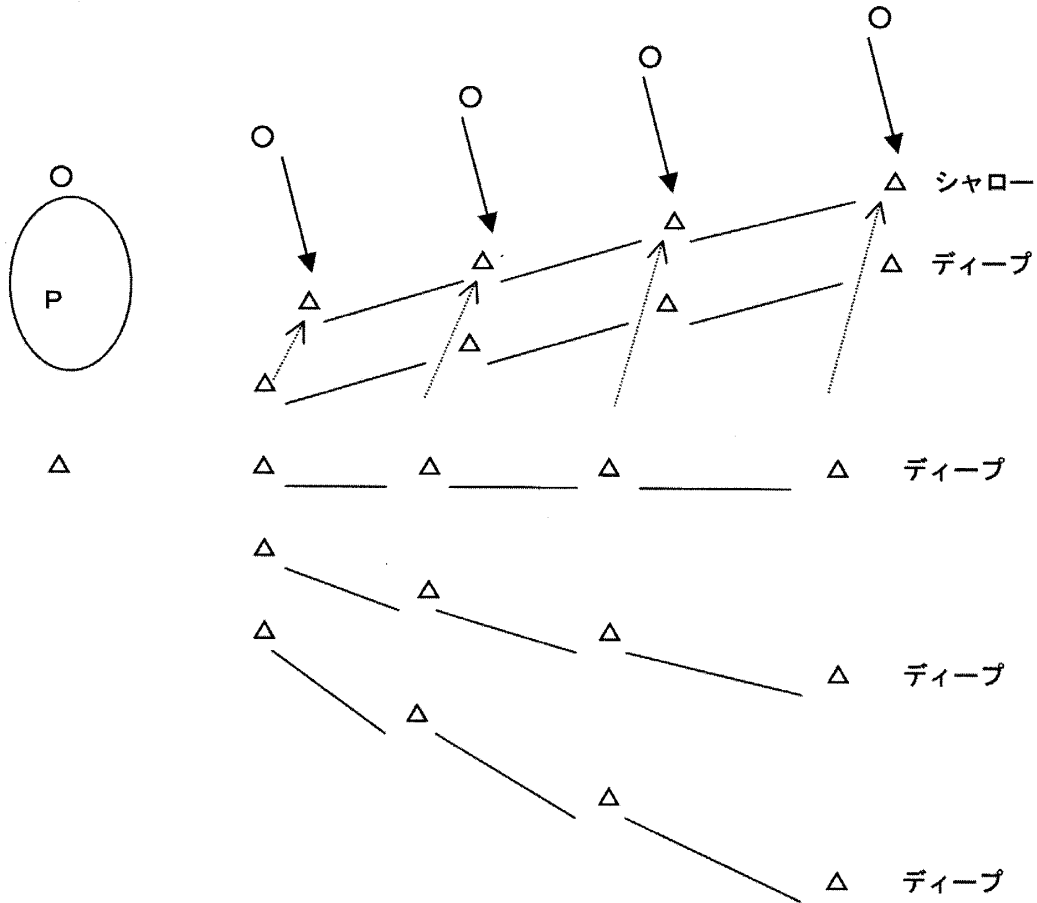
●ドリフトディフェンス
(図1-4)



2) ディフェンスの方法とディフェンスを行うときのスピードの関係について
タックルラインの位置からシャローディ

フェンスとディープディフェンスに分けられる。(図2)

(図2)



①シャローディフェンス

シャローディフェンスの基本

1. 速いポジショニング：オフサイドラインから1 m 離れる意識と低い姿勢で準備する。
2. コーリング：内側のプレイヤーにシャローを伝える。
3. DFコース：迷わず前に出て、ボールをもっているプレイヤーとの間合いをできるだけ早く詰める。

このディフェンスはタックルラインを比較的アタック側陣地に推し進めたものである。

シャローディフェンスを使うのはマークとつ

めの時である。

マークディフェンス時は、マークするアタック側のプレイヤーがわかりやすいため、早い出足でプレッシャーをかけられる。

但し、近年はアタックラインの裏から入ってくるエキストラマン参加型のプレーが増加しているため、すれ違いで抜かれることがある。

つめディフェンス時は、マークするアタック側のプレイヤーは内側から順番に決めることができるためわかりやすく早い出足でプレッシャーをかけられる。

しかし、パス能力のあるプレイヤーが相手にいた場合は飛ばしパスを使って大外を抜かれることがある。

②ディープディフェンス

ディープディフェンスの基本

1. 速いポジショニング：オフサイドラインから1 m離れる意識と低い姿勢で準備する。
2. コーリング：内側のプレーヤーにディープを伝える。
3. DFコース：前に出ないで、ボールをもっているプレーヤーとの一定の間合いを保ち、人数がそろった時点で、間合いを詰める。

ディープディフェンスを行うのは、ドリフトディフェンス時である。

ドリフトディフェンス時はマークするアタック側のプレーヤーの動きを比較的余裕を持ってみることができ厚みのあるディフェンスができる。

反面、相手の動きを見てマークを外側のプレーヤーに代えるため、早い出足ではプレッシャーはかけられない。また、たての突破に強いプレーヤーに対したときには、差し込まれ、ゲインを許すことが多い。

3) ディフェンス方法の組み合わせ

ディフェンスで攻めていくためには、いくつかのディフェンス方法を使い分けることが効果的である。一定のディフェンスを行ってはそのディフェンスの弱い所を仕掛けられてしまうからである。また、毎試合、同じ攻撃を仕掛けてくるチームに対しても有効である。例えばマークディフェンスとつめディフェンスなどを組み合わせて用いると相手チームのプレーヤーはどこにディフェンスの穴があるかわからなくなってしまふからである。

こういったことを行いディフェンス側が一定の動きをすればアタック側に脅威を与える。これがディフェンスの戦術であるが、逆にどこかに穴があることはアタック側に認識させてしまふ。言い換えればディフェンスラインを突破されるスペースがあるということである。確かに前述したようにいくつかのディフェンスパターンの組み合わせを用いることによって、アタック

ク側を混乱させ、そのスペースを隠すことはできる。しかし、アタック側がそのパターンを読み取って意図的に弱点となるスペースを責めてきたときは突破されるときがある。

ディフェンスは常に受身であるから仕方がないのである。

その対処法として、筆者は二つの方法を取り入れて、ディフェンスを指導している。その結果2005シーズンは非トライ数も激減し、2部リーグで優勝を飾ることができたのである。

以下で、そのディフェンス方法について述べる。

3. 工夫したディフェンス方法について

一つ目は一定化の原則から離れることである。つまり、個人の判断を取り入れることである。

例えばマークディフェンスにおいて相手センターをマークするはずのセンターが、ラインの後ろから入ってきたエキストラマンにマークを変えるようなことである。このようなプレーを“(ポジションの名前) 臨機”と呼んでいる。例：1セン臨機(図3)

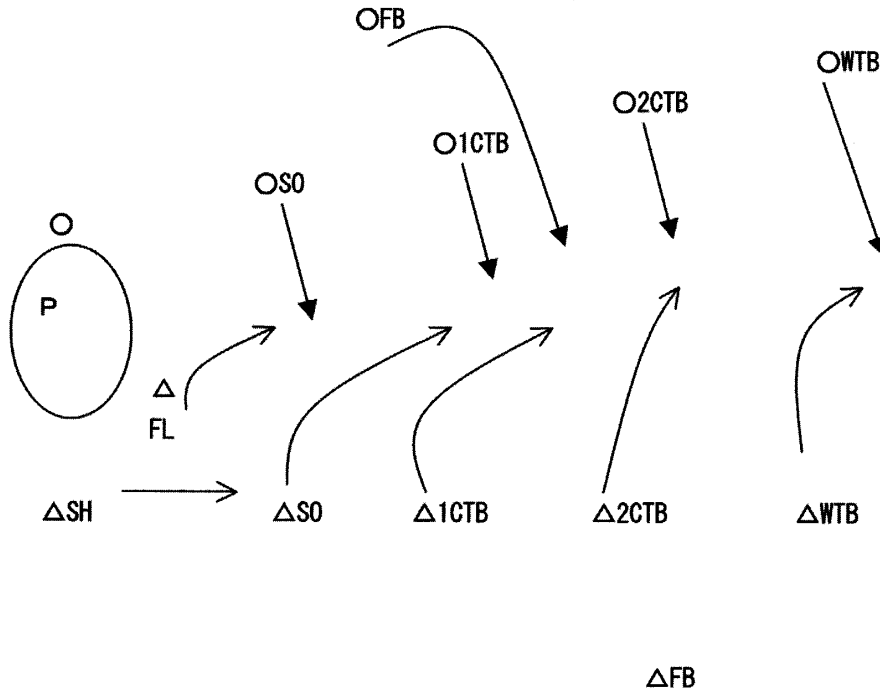
二つ目は頭抑えの立ち位置で、つめディフェンスを行うというものである。(図4-1. 2)

本来、つめディフェンスの原則は、インサイドショルダーといって、ディフェンダーは右アタックラインに対したとき、自分の外側の肩(この場合は右肩)をアタック側のプレーヤーの内側の肩(この場合は右肩)に合わせて立つ。そしてディフェンスライン全体でアタック側をタッチラインに押し出していくというものである。しかし前述したように、エキストラマンの参加による突破に弱いという弱点がある。前に出て、なおかつそういったプレーに対抗するには、ディフェンスの立ち位置を頭抑えかそれ以上にする必要がある。頭抑えの立ち位置というのは、先ほどの立ち位置とは逆にディフェンダーは右アタックラインに対したとき、自分の内側の肩(この場合は左肩)をアタック側のプレーヤーの外側の肩(この場合は左肩)に合わせて立つ。こうして早い出足でディフェンスに出てもエキストラマンなどが入ってきても前述し

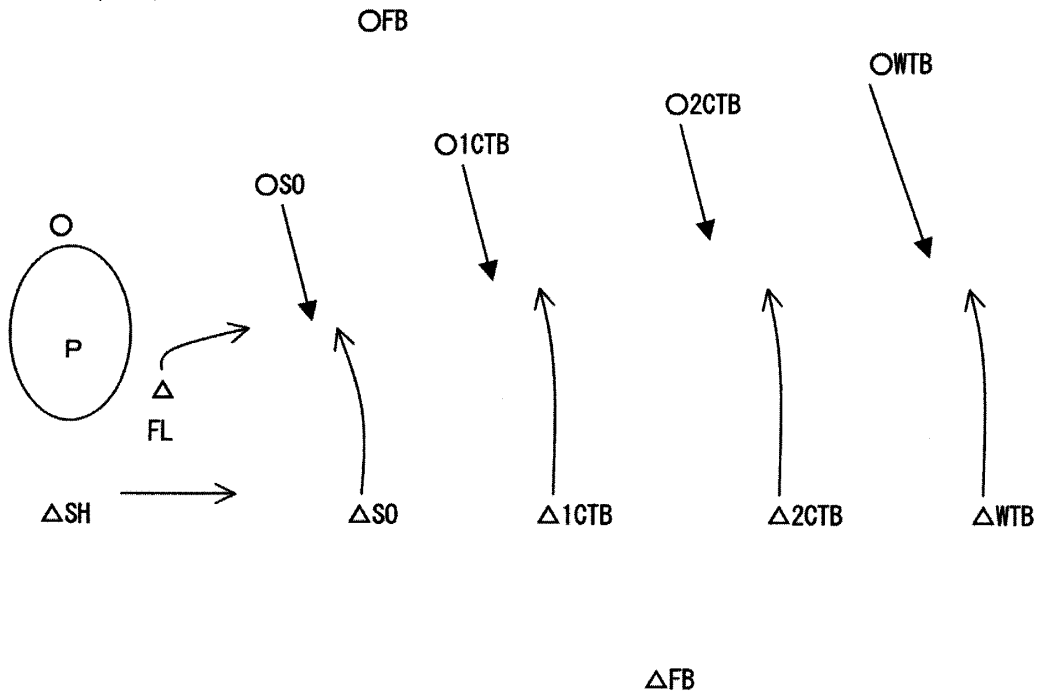
た臨機プレーで対応できるのである。(インサイドショルダーで立つとエキストラマンの参加が見にくい、またはそれに対応しようとしても間に合わないのである。) また、ワンアーム、ツーアームといった距離をおいて頭抑えに立つ場合もあるが、これはチーム事情やその時のプ

レーヤーの足の速さなどによって変える。但し、“外側からつめる”という意識を持たないと簡単に抜かれてしまうことがあるので注意が必要である。また前回の論文で述べた、アップした後のプッシュの意識をしっかりと各プレーヤーが持つことが重要である。

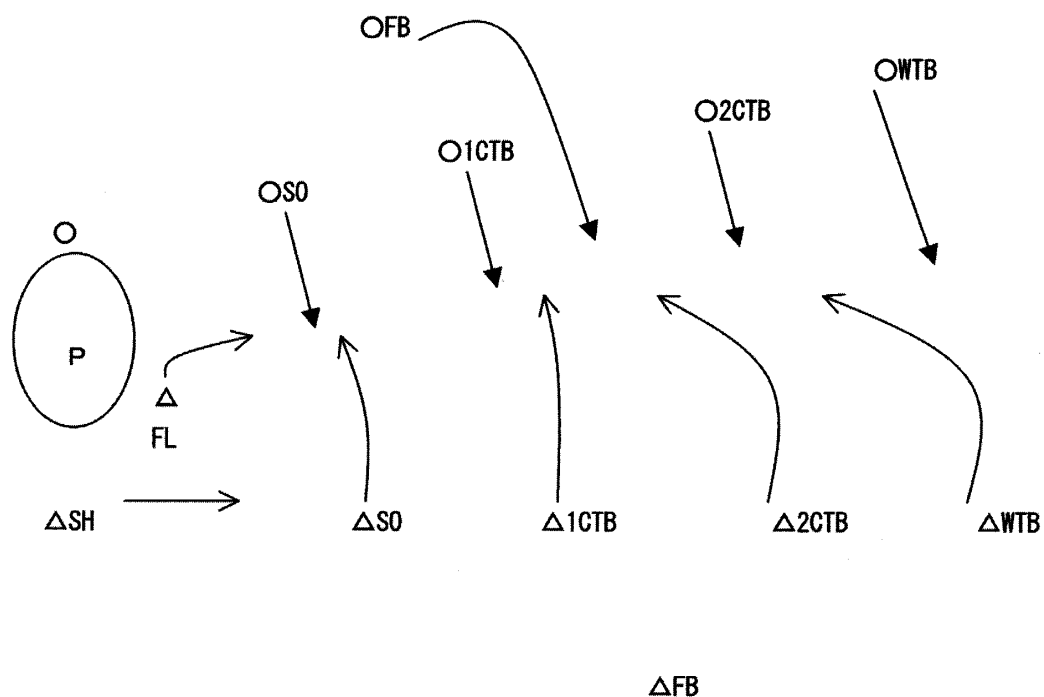
● 1 セン 臨機
(図3)



● 頭抑えのつめディフェンス
(図4-1)



(図4-2)



参考・引用文献

- (1) 日比野弘・松元秀雄・山本巧 1994 「ラグビーの作戦と戦術」
- (2) 日本ラグビーフットボール協会強化推進本部 1998 「楯円進化論」
- (3) 高城靖尚 2005 盛岡大学紀要 第22号 「ラグビーフットボールにおけるディフェンスとアタックの基本」 緒言